

振り返れば発掘現場

退職にあたり一文を求められた。「遅筆文盲」なのが故に切羽詰った日々だというのに。何を書けばいいのか。披露すべきことなど思いつかない。あるのは在職証明としての思い出か。想い迷っていたらメ切が過ぎた。人には長く、自らには短い36年。うち、現場へ出なかったのは、1976年の飛鳥資料館勤務と2003年の埋文センターの2年だけ。ずっと同じことの繰り返し。そんな気がする。

1973年、2度目の年男。誕生年を入れたら3度目か。記念すべき最初の現場は平城宮内裏地区での研修現場。大きな石敷井戸周辺の実測を同期生と二人で1週間かかり「遅い」と叱られた。その他は覚えていない。この夏は三笠中学跡地の井戸底の砂利洗いで過ぎ、秋にはウツナベ古墳の埴輪が待っていた。洗浄・接合でその年は暮れ、明くる2月、「原稿はまだか」「遅い」の次の一言、「来年は藤原」で平城のことは夢となる。まさに終始一貫、5度目も同じか。地道を自転車ですりつ、年に2回の大きな現場（この年は大官大寺金堂と藤原宮大極殿院西外郭）と不時の小さな現場。それらを通して、発掘の楽しさや道具と人の使い方を諸先輩・同僚そして作業員さんに教わった。平吉遺跡、飛鳥寺、山田寺、坂田寺…。1981年から石神遺跡、水落遺跡、雷丘東方遺跡、飛鳥池遺跡、そして藤原宮。面積の大小、報道の有無に関わらず総てが第一級の遺跡。それらに携わる幸福な時間の連続。飛鳥藤原の30年。最後の4年は平城で。図面をみれば土色までが蘇り、掘り間違いが夢に出る。現場にいないれば整理室。出土土器には現場の様子も、使った人、作った人の生活や思いがこもり、それらに触れるようで時（間と宿題）を忘れた。「飛鳥は怖い」という。しかし、本当に怖いのは出なかった場合。「9割9分は遺跡の力。気づかなければゼロになる。」これは真実。見落として無いか。先入観、迷路に陥って無いか。真価の何割、いや何分を引き出し得たのか。それらが何も言わないことをいいことにして…。

振り返ったその先には、切れかかった堪忍袋の紐を繕いつつお付き合い頂いた方々がいた。その恩に報いることは何一つしていない。せめて一言、ありがとうございました。「遅い！ 今頃言っても、もはや聞こえない人もいないではないか。」

（都城発掘調査部 西口 壽生）

定年退職???

1970年9月入所以来、38年9か月、奈良国立文化財研究所（公務員）・独立行政法人奈良文化財研究所（公務員型）・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所（非公務員）と、3回も名称が変わるのを、経験致しました。

入所当時は、何年奈文研に勤められるかなと考えていました。それが定年退職、自分自身驚いています。

仕事では自動車運転手として採用され、何人もの、文部大臣・皇室・その他沢山の人を乗せ、いろいろな場所へ行きました。帰り道がわからなくなり、警察・消防署で道を聞きながら帰ったことも多々ありますが、今は良い思い出です。

独立行政法人になる前の年に、事務官に変わり現在の仕事をしています。

現在の仕事は毎日毎日朝が早く、眠い目をこすりながら勤めていましたが、それにも慣れ、発掘事務は変化に富んだ楽しく苦しい仕事、でもいろいろな現場を見せていただきました。

それから、レクリエーション（奈良地区共済）で野球・卓球・バレーボール・ソフトボールに参加し、奈良地区の公務員の人たちと楽しく、スポーツに汗を流したのを思い出します。

昼休みはサッカーを雨の日、雪の日、毎日玉を蹴り、それに飽き足らず、奈良社会人リーグに登録したいと思い、リーグ登録には審判の資格が必要なので、二日間、学科・実技を受けて資格を取り、やっと登録。自衛隊・刑務所（受刑者）その他沢山のチームとの試合に土曜日・日曜日朝から夕方まで、サッカーをしていました。

還暦祝も、有志の方々に、盛大に、開催して頂き感謝しています（写真）。

最後に38年6か月、長い間本当にありがとうございました。

（管理部 飯田 信男）

